

大学を出て、順調に就職して半年。俺はとある悩みを抱えている。見た目に眼鏡、スーツ、真面目。故に直属の上司からも間違いなく「真面目だね」と言われる。

そんな俺の隠れた癖。

それは………エロ妄想が止まらない。

トイレの個室に入ると、この密室でどんな淫らなプレイができるかを考えてしま

う。
残業中のオフィスで乱れ果てて喘ぎながらイク自分を想像する。
相手の顔もはつきりしないのに、弄ばれて悦ぶ自分がいる。

どうしてこうなった？

切っ掛けも思い当たらないが、気付けばこうなんだから性癖なんだろう。
ただ、これを発散させる場所はない。

恋人もない。いたとしてもこれを晒すのは躊躇いがある。

そんな中で、俺はずっと悶々としていた。

「はあ……」

思わず溜息をつく昼休み。自販機スペースでコーヒーを飲んでいると、不意に声がかかった。

「三田君？ どうしたんだい？」

その声に、俺はハッとしてそちらを見た。

立っていたのは部長の佐伯さんだった。

年の頃は四十近いだろうか。だが、決しておじさんではない。柔らかな茶色の髪を整え、見た目にも清潔感とさりげないオシャレが滲む、穏やかな上司だ。

この人は新人にも目を向けてくれる人で、皆の話を聞いてくれる。それもあり、他の上司含め、佐伯さんの事を「仏」と呼ぶ事もある。

そんな人が気遣わしげに近付いて、同じくコーヒーを買い、隣に並んだ。

「何か、悩み事かい？ 困った事でもあったかな？」

「ああ、いえ！ 仕事の方は大変充実し、皆さんにも丁寧なご指導を頂いております」

そう返すと、佐伯さんは笑って「それは良かった」と言ってくれた。

「じゃあ、プライベートかな？」

「あ……はい、ちよつと」

言えないけれど、悩んではいる。

そうして押し黙った俺を見て、佐伯さんは苦笑した。

「言わなくていいし、気を遣わなくていいよ。深刻そうなら聞くけれど、最近はずライベートに上司が過剰に首を突っ込むとハラスメントになるだろ？」

「ああ、そんな！ 佐伯部長をそんなふうにした事は一度もありません！」
慌てて否定する。言えないのは、あまりに性癖過ぎるからなんだ。

これに佐伯さんは笑って、ポンと励ますように肩を叩いた。

「まあ、本当にしんどくなったら何時でも話を聞くよ。勿論、仕事の事で何かあったら直ぐに報告してくれ」

「はい。ありがとうございます」

本当に、上司に恵まれた。新卒でこんな神上司と巡り会えたのは奇跡だろう。残業はあるが、ブラックでもないしな。

だが、このままでいいとは思えない。何かしらの解決方法を模索しなければ。

……本当を言えばある。誰の力にも頼らず、自己完結できそうな方法が。

だが……いや、もう社会人だ！

グッと拳を握り、俺は決意する。

週末土曜日、俺は大型アダルトショップに行く！



そうして週末。生活圈から電車で三十分以上をかけて降り立った、某電気の町。週末ともなると人が多い。

俺は入念な下調べをし、地図アプリと睨み合いながら見知らぬ路地へと入り、迷いながらもその店に到着した。

見た目は普通のビルだ。オシャレでもなんでもない。

だが入ると雰囲気は一変する。

入ってすぐ見えるのは階段。その奥には店員のいるカウンター。左手側に商品スペースが広く取られていて、薄暗い。

一階は映像コンテンツや書籍だろうか。数人の男性客がいる。

ゆっくりと階段を登っていく。二階から四階までは女性やカップル向けなのだろう。その多くがカップルらしく、案外人がいるものだ。

だが、階層が上がると徐々にニッチになる。人が減る。

コスプレ衣装が置いてある場所までは良かったが、その上はとうとう俺しかいなくなつた。

そして、目的の場所だった。

男性向けアダルトグッズ売り場。

薄暗く、間接照明のそこを前にゴクリと喉が鳴る。緊張で手汗をかいてきた。だが、行くと決めたのだ。ここでエロい玩具を買い込み、自宅で快樂煩惱まみれのソロプレイをする！

その第一歩を、踏みしめた。

手前は男性向けでもお一人様用と言った感じだ。テ〇ガ、ワイフ辺りがある。だがそこからコーナーを曲がると、途端に見慣れない物が増える。

主に、アナル開発などに定評のある玩具だ。

そして、俺はソレを見つけた。

「これが、エネマグラ」

白く奇妙な形状でありながら、その効果は絶大と聞く。

これをお尻に入れると前立腺を刺激し、えも言われぬ快樂を得るとネットで読んだ。ちんこでイクより深い……興味深い。

だが、数が多くて何がいいのか分からない。手に取って見てみると、先端が動くとか、角度がとか、バカイキ間違いないとかある。

俺にはどれも同じに見える！

そうして悶々と複数商品を手に取り、背中を向けていた時だった。

「何か、お探ですか？」

「！」

まずい、店員がきた！

いや、まずい事はない。購入希望者でやましい所はない……エネマグラ手にして
る時点でやましいかもしれない。

だが……なんだろう？ 声に聞き覚えが。

「失礼、不審な者ではないよ。何か悩んでいる様子だったから、声をかけたんだ。
私は複数持っているから、迷うなら相談に乗れるよ」

そんな上級者なのか！

藁にも縋る思いで俺は声の主に振り返り……フリーズした。

「……佐伯、部長？」

「三田君？」

それは、何とも奇跡的で最悪な出会いであつた。